【平成30年度　苗場山麓ジオパーク学術研究実施報告書】　明治期苗場山麓地域の郵便ネットワークに関する研究

中央大学大学院　文学研究科日本史学専攻
博士後期課程2年　高野宏峰

1．はじめに

道は過去も現在においても、ヒト・モノ・情報などをつなぎ、生活にとって重要な要素である。近世における地域の道は村絵図から見ることができるが、小集落の里程や公的ルートとしての道を判別するのは容易ではない。そこで、やや時代は下るが明治期の郵便配達線路図とその関連史料により、村内集落の人口と、それぞれの里程が判明する。集落内の道の利用形態がダイレクトに視覚化可能なものであり、地域内交通の実態をうかがわせることになる。

本研究では郵便局ネットワークの末端である集落への郵便集配状況と道の関係を整理し、山村集落間の道を通じた交通の実態を苗場山麓の栄村地域を中心にさぐる。

2．先行研究

明治期の郵便局ネットワークの調整と集配制度や実態を一括して論じた研究としては、近辻喜一（2004）、藪内吉彦・田原啓介（2010）、井上卓朗（2011）、小原宏（2012）などがある。

近辻（2004）では、武蔵国多摩地域の郵便線路の変遷と状況を述べ、明治期の多摩地域を含む神奈川県が地方配達郵便を施行する際に、村々に函場を設けて毎日に集配を行い、村民が戸長役場最寄の箱場で切手や葉書を購入してポストに投函することができ、村落単位での郵便普及に貢献したことを指摘している。

藪内・田原（2010）では明治18年（1885）の郵便区市内規画法に基づき各郵便区は「市内」（郵便局の所在する市街地とその境界6町〈約654メートル〉以内の地またはその6町以内に跨る1集落であること）と「市外」に区分されたことを述べ、明治19年の滋賀県石部郵便局の集配路線図を示し、同局の郵便線路が局を中心に東西南北に広がりそれぞれ1周して帰局できるようにされていたことなどが述べられている。

小原（2012）では、安房国を中心に郵便局の集配拠点の再配置・担当集配地域の調整状況を分析し、郵便局ネットワークの調整が中央の合理性の追求のみで実行されたわけではなく、地元の情勢を踏まえた要望に基づいて検討されたことを明らかにした。

栄村地域の郵便について記述したものとしては、『長野県通信沿革誌』（1916）、『栄村史水内編』（1960）、『栄村史堺編』（1964）がある。

『長野県通信沿革誌』は長野県全体の郵便事情を概観、明治期を中心とした郵便各局設立年や、郵便線路の改廃がわかる。『長野県史』に収録された「県下三等郵便局一覧」からは明治24年5月における森郵便局が集配人1人と雇1人を有し、函場4か所で郵便区の惣村戸数882戸であったことがわかる。

『栄村史堺編』では、明治12年に森郵便局が開局となり、大正12年に平滝に移され平滝郵便局になったこと。明治13年から18年まで箕作郵便局があったこと、昭和4年に野田沢郵便局、長瀬郵便局が開局されたことなどがわかる。

『栄村史水内編』では、明治32年の森郵便局には、局長1名、事務員2名、逓送人員4名、集配人員6名がおり、書状葉書共2万4314通を配達していたこと、大正14年に飯山鉄道が開通すると平滝局と横倉駅間の逓送に郵便荷車が使用されたことがわかる。

以上の先行研究のうち、郵便局ネットワークの中で、郵便局間の事例については研究が進んでいるが、その先の郵便区の中の集配機能についての事例が不足している。本研究では地域の先行研究をベースに栄村地域の郵便事情をまとめるとともに、鉄道の開通以前の集落同士の通行を、集配線路を見ていくことで明らかにしていこうとするものである。

3．栄村地域の郵便事情

（1）郵便局の沿革〔明治5年(1872)～明治21年〕

栄村の成立は昭和31年（1956）で、それまでは下水内郡水内村（豊栄村・北信村）、下高井郡堺村（箕作村・志久見村）に分かれていた。郵便区と行政区は必ずしも一致せず、近隣の郵便取扱所の郵便区に編入されたこともあった。明治18年に西大滝郵便局・箕作郵便局が廃止となり、栄村地域は森郵便局の管轄となった。この時期は全国区的に郵便局の改廃があいつぎ、長野県においては特に減少が激しかったとされる。

明治5年7月1日
飯山郵便取扱所開所。
明治7年3月1日
桑名川郵便取扱所開所。豊栄村（白鳥村・平瀧村）・北信村（森村・青倉村）・堺村（箕作村・志久見村）を郵便区とする（他に照岡村・一山村等）。
明治12年4月16日
北信ノ内森郵便局開局。北信村を郵便区とする。
明治12年4月16日
照岡ノ内西大瀧郵便局開局。豊栄村を郵便区とする（他に照岡村ノ内西大瀧）。
明治13年4月16日

箕作郵便局開局。堺村を郵便区とする。
明治18年2月
森郵便局で郵便貯金の取扱いを開始。
明治18年12月1日
西大瀧郵便局・箕作郵便局廃止にて、豊栄村・堺村は北信ノ内森郵便局の郵便区に編入となる。
明治19年6月1日
北信ノ内森郵便局、北信村森郵便局と改称する。
明治21年12月12日
北信村森郵便局、森郵便局と改称する。

＊『長野県通信沿革誌』『栄村史水内編』『栄村史堺編』より作成

（2）郵便線路沿革　〔明治21年（1888）～明治44年〕

全国には「郵便線路」という郵便局相互間を結ぶ輸送ルートが決められ、道路・鉄道・水路を利用して郵便物が逓送された。明治32年度の森郵便局統計には、森郵便局傭員のうちに「継送人4人」とあるが、これが郵便線路において郵便物の逓送を担った者であろう。森郵便局は飯山局と小千谷局を結ぶ郵便線路の中に位置し、隣接する桑名川局や下船渡局と逓送脚夫による郵便物の交換を行うなどしていた。この線路は従来の谷街道を利用した。

しかし、例えば明治32年の森―桑名川線は11月半ばから5月半ばまで降雪や吹雪による道形消失や雪崩のため、逓送速度を落として一歩一歩進むか、雪崩を避けて対岸の迂回路を利用せざるを得ず、森郵便局をめぐる郵便線路では逓送に支障が出ていた。

明治21年5月現在	大井平―桑名川線	交換便（森）
明治25年3月31日	大井平―桑名川線	廃止
明治25年4月1日	飯山―小千谷線	順送便として開線（桑名川、森他）
明治31年12月26日	飯山―小千谷線	廃止
明治31年12月27日	森―桑名川線	交換便として開線
明治31年12月27日	森―下船渡線	交換便として開線（大井平）
明治32年12月16日	森―桑名川線	持戻便として改正
明治35年7月1日	桑名川―森線	持戻便として開線
明治38年4月1日	森―桑名川線	往復便として改正
明治38年4月1日	桑名川―森線	往復便として改正
明治40年5月18日	桑名川―森線	廃止
明治42年8月1日	桑名川―森線	往復便として開線（自4月至11月）
明治44年5月1日	桑名川―森線	廃止（期節）
明治44年9月16日	桑名川―森線	施行（自4月至11月）

＊『長野県通信沿革誌』より作成

4、森郵便区の集配線路

（1）集配線路の概要と変遷

郵便局のうち、受持区の郵便物を集めて他の郵便局との受け渡しを行い、受持区に配達する郵便局が集配局であり、森郵便局もこれに該当する。全国には「郵便線路」という郵便局どうしを結ぶ輸送ルートがあるが、さらに郵便区内でも「集配線路」が定められ、郵便局を中心に数ルートが広がり、それぞれ1周して帰局できるようにされていた。

集配線路には市内と市外があり、市内は郵便局の市街地とその周辺となり、それ以外を市外とした。森郵便区は下水内郡水内村と下高井郡堺村を管轄とするが、2村の間には千曲川があるため、箕作や寺石の渡船場を利用して各集落への集配がなされていた。

＊1里＝36町、1町（丁）＝60間、1里＝3927.2m、1町＝109.09m、1間＝1.8182m

○A：明治21年市外集配線路の里程

第1区（北信村の内旧青倉村より堺村の内字小瀧に至り又青倉村を経て帰局、9里18丁：約37㎞308m）

森郵便局―青倉―横倉―平滝―白鳥―箕作―泉平―月岡―野田沢―大久保―小滝―（局）

第2区（堺村の内旧志久見村より字切明に至り又志久見村を経て帰局、往復越後国寺石村渡舟、22里19丁：約88㎞472m）

森郵便局―寺石渡船場―子種新田―宮ノ原―志久見―柳在家―切欠―長瀬―堀切―野口―坪野―天代―北野―中野―極野―当部―小赤沢―屋敷―上ノ原―和山―切明―（局）

○B：明治23年市外集配線路の里程

第1区（水内村青倉より堺村字小滝に至り青倉を経て帰局、9里18丁：約37㎞308m）

森郵便局―青倉―今泉―横倉―北原―平滝―白鳥―渡船場―箕作―泉平―月岡―太巻―野田沢―大久保―程久保―小滝―（局）

第2区（堺村志久見より極野に至り志久見を経て帰局、8里20丁：約33㎞599m）

森郵便局―寺石渡船場―志久見―雪坪―塩尻―暮坪―柳在家―切欠―長瀬―長瀬新田―堀切―当部新田―野口―坪野―天代―北野―中野―極野―当部―笹原―（局）

第3区（堺村大字秋山字小赤沢より切明・鉱山に至り（寺石村渡舟にて往復）、30里32町：約121㎞）

森郵便局―寺石渡船場―志久見―柳在家―切欠―長瀬―小赤沢（往復）

小赤沢―屋敷―上ノ原―和山―切明―切明鉱山―赤湯温泉―（小赤沢）

○C：明治34年市外集配線路の里程

第1区（水内村大字北信字乗落より堺村字泉平に至り

帰局、10里12丁：約40㎞581m）

森郵便局―乗落―青倉―今泉―横倉―北原―平滝―白鳥―船場―泉平―（局）

第2区（堺村字雪坪より字塩尻に至り帰局、8里32町：約34㎞909m）

森郵便局―雪坪―野田沢―程久保―大久保―大巻―月岡―箕作―小滝―塩尻―（局）

第3区（堺村字志久見より字暮坪に至り帰局、9里10丁：約36㎞436m）

森郵便局―志久見―柳在家―切欠―長瀬―笹原―当部―北野―中野―極野―天代―坪野―野口―当部新田―長瀬新田―堀切―暮坪―（局）

第4区（堺村字小赤沢より字屋敷に至り帰局、夏期：25里11丁：約99㎞381m　冬期：26里5丁：約102㎞654m）

森郵便局―（夏期：宮之原・小池・上日出山等経由／冬期：大井平局・相吉・前倉等経由）―小赤沢―上ノ原―和山―切明―切明鉱山―屋敷―（局）

○D：明治36年市外集配線路の里程

第1区（水内村大字北信森より堺村字泉平に至り帰局、7里20丁：約29㎞672m）

森郵便局―乗落―青倉―今泉―横倉―北原―平滝―白鳥―船場―泉平―（局）

第2区（堺村字雪坪より字塩尻に至り帰局、9里19町：約37㎞418m）

森郵便局―雪坪―野田沢―程久保―大久保―大巻―月岡―箕作―小滝―塩尻―（局）

第3区（堺村字志久見より字暮坪に至り帰局、9里：約35㎞345m）

森郵便局―志久見―柳在家―切欠―長瀬―笹原―当部―北野―中野―極野―天代―坪野―野口―当部新田―長瀬新田―堀切―暮坪―（局）

第4区（堺村字小赤沢より字切明鉱山に至り帰局、26里22丁：約104㎞508m）

森郵便局―小赤沢―屋敷―上ノ原―和山―切明―切明鉱山―（局）

○E：明治40年市外集配線路の里程

第1区（水内村大字北信のうち青倉より大字豊栄のうち白鳥および堺村字泉平に至り帰局、8里14丁：約32㎞945m）

森郵便局―青倉―今泉―（青倉）―横倉―北原―平滝―白鳥―泉平―（局）

第2区（堺村字野田沢より字雪坪に至り帰局、9里19丁：約37㎞418m）

森郵便局―雪坪―野田沢―程久保―大久保―月岡―大巻―箕作―小滝―塩尻―雪坪―（局）

第3区（堺村字志久見より暮坪に至り帰局、9里4丁：約35㎞781m）

森郵便局―志久見―柳在家―切欠―長瀬―中野―笹原―当部―天代―北野―極野―坪野―野口―当部新田―長瀬新田―堀切―暮坪―（局）

第4区（堺村字小赤沢に至り帰局、11里26丁：約46㎞36m）

森郵便局―小赤沢―（局）

第5区（堺村字小赤沢より字切明鉱山に至り帰局、8里12丁：約32㎞727m）

小赤沢―屋敷―上ノ原―和山―切明―切明鉱山―（小赤沢）

森局2度集配地第1区（水内村字北原及び平瀧に至る1回往復、3里22丁：約14㎞181m）

（2）集配線路変遷の特徴

①A→B（明治23年）

・集配区画を2区から3区へ増やす。

・旧第2区から秋山方面への便を分離。

②B→C（明治34年）

・集配区画を3区から4区へ増やす。

・旧第1区を第1区と第2区に分割。千曲川両岸に散在した字を整理。

・旧第2区のうち雪坪・塩尻の2字を改正第2区へ編入。

・千曲川左岸側の配達線路と右岸川配達線路を分離。

・秋山郷への集配を、志久見川右岸側で実施し、字長瀬を経由しない。

③D→E（明治40年）

・集配区画を4区から5区へ増やす。

・旧第4区を第4区と第5区へ分割。第4区は局と小赤沢間の往復便とし、第5区を小赤沢を起点とした秋山郷各字への配達経路とする。

・すべての集配区画で毎日配達が可能となる。

5、秋山郷の郵便事情

長野県側の秋山郷（小赤沢・屋敷・上ノ原・和山・切明等）への郵便集配は、外部との交通が稀であることから重視されてはいなかった。明治32年の史料によると、連日降雪が続くと集配人は10数日を経ても帰局することはできず、夏季でも集配に2日を要したという。

秋山郷への集配線路の強化をめざし、2期にわたる願書の提出が確認できる。下記は秋山の発展などの理由を列挙したもので、明治40年には毎日集配を願い出ている。

○明治32年

小赤沢尋常小学校開設／新聞雑誌講読者の増加／苗場神社への参詣／切明温泉への浴客／各種鉱山の発見

○明治40年

切明鉱山の採掘拡大／直江津製材会社の森林買入／突き出し工場の設置／秋山への牧場開設／陸軍省および大林区署の測量技師派遣／高山・森林・鉱山・異草などの採坑・探検／山葡萄（やまぶどう）・木通蔓（あけびかずら）などを求める商人の出入

6、函場の設置

函場とは、切手売下所と郵便掛函が設置された場所である。切手を入手しそれを張って葉書を出すことができるので、人々が身近に郵便に接することができた。
明治16年頃に地方約束郵便制度に関係して各村役場に函場が設置された。順次学校所在地など10か所へ拡大していった様子がうかがえる。

白鳥組は、元は西大瀧郵便局の管轄にあり、郵便切手売下所も設置されていた。しかし、明治18年（1885）に西大瀧郵便局が廃止となり、白鳥組が北信ノ内森郵便局の郵便区へ編入された際に切手売下所も返還してしまった。したがって、白鳥組の人が信書を出すには最短でも18丁（約1963メートル）離れた平瀧の函場まで行かなければならなくなった。森郵便区の中でも白鳥組は最大の戸数を有し、東頚城郡へも抜けられる要路であり、函場の設置が求められた。

明治18年に西大瀧郵便局と箕作郵便局が廃止されたことで森郵便局が栄村地域の集配を一手に担うこととなった。その中で郵便に関していえば、住民は函場さえあればこと足りるので、効率的に郵便網を拡充したことがうかがえる。明治24年以前は郵便局1、函場4であったのが、明治37年に郵便局1、函場10となっている。函場の設置は地元からの要望を管轄郵便局が上申して設置されるが、集落住民の個々の郵便利用の増加が函場設置をもたらしている。

○函場の拡充情況　　は新設分
・明治24年以前
森局―1里31丁―平滝―15丁―箕作―27丁―野田沢―1里20丁―志久見―1里23丁―（局）
・明治24年11月
平滝―1丁15間―白鳥
・明治25年
志久見―21丁―長瀬
・明治25～37年
森局―8里35丁―小赤沢
箕作―11丁―大巻
・明治37年
森局―13丁―青倉
長瀬―9丁＋5丁＋5丁―北野

○学校の設置状況
箕作　：箕城学校（明治15年）→百合居尋常小学校（明治25年）
志久見：志久見簡易学校（明治19年）
小赤沢：小赤沢簡易学校（明治21年）→小赤沢尋常小学校（明治26年）
このほか長瀬・北野に学校が所在

○村役場・巡査駐在所の設置状況
平滝　：水内村役場、巡査駐在所
野田沢：堺村役場
大巻　：巡査駐在所

7、おわりに

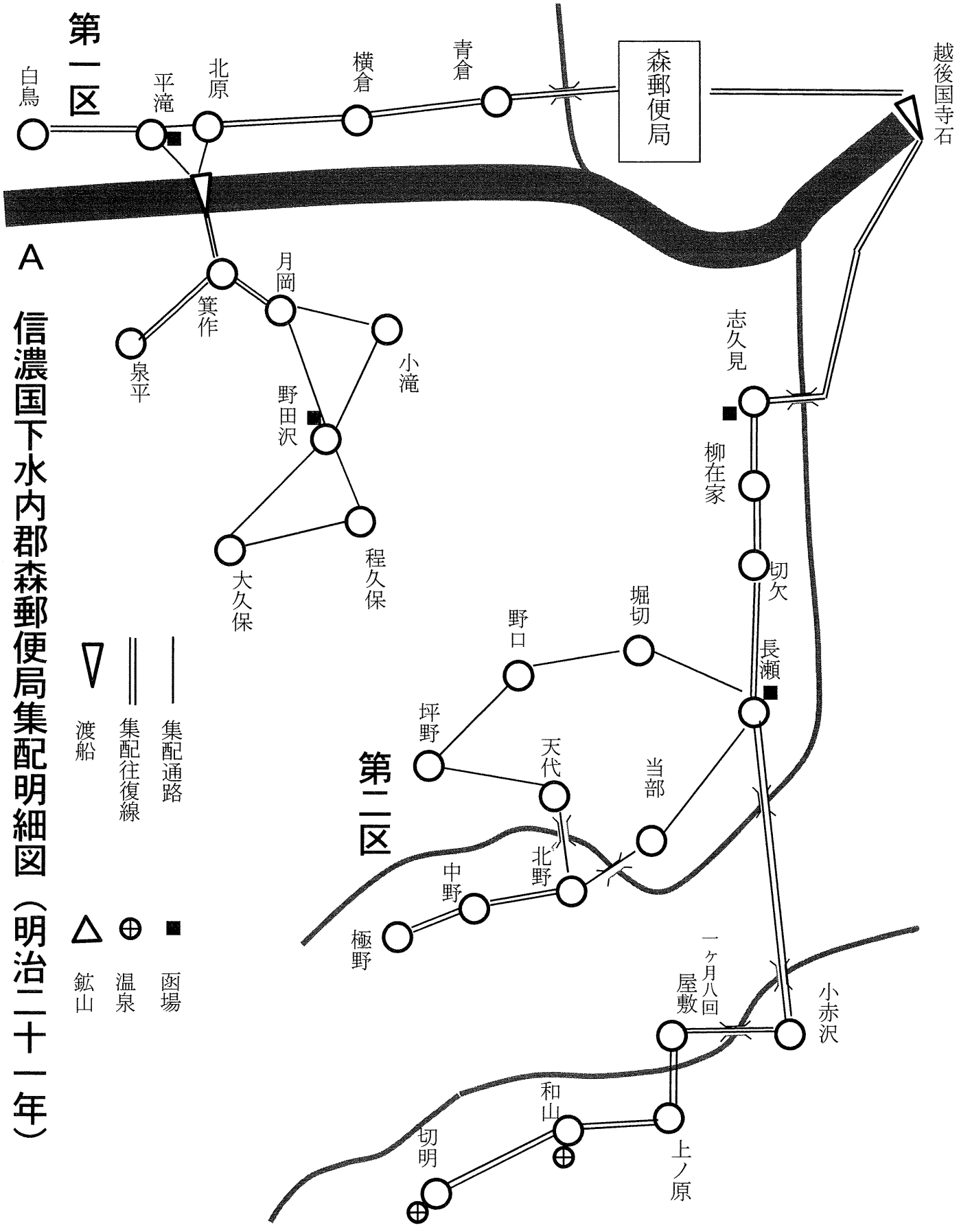
・長野県等では明治10年代後半に郵便局ネットワークの見直しの過程で、郵便局数の大幅な減少が見られ、栄村地域でも西大瀧郵便局と箕作郵便局が廃止された。郵便の需用への対応は、函場の設置と配達線路の拡充によって行われた。

・栄村は昭和31年に下水内郡水内村と下高井郡堺村が合併して成立する。それに先立つ明治18年には、森郵便局が水内村と堺村を郵便区とし、すでに現栄村地域を一つの公的機関により包摂していた。

・千曲川右岸の回達ルートは森郵便局を出発点にすることで箕作と長瀬が分断されるなど、近世の廻状連絡ルートとは異なる面がみられる。堺村側では、千曲川南岸での廻状連絡ルートを近世期に利用していたが、明治20年代等の郵便ルートでは堺村内でも別々のルートに分けられ、箕作・寺石の渡船場利用を前提としたルートが形成されていた。

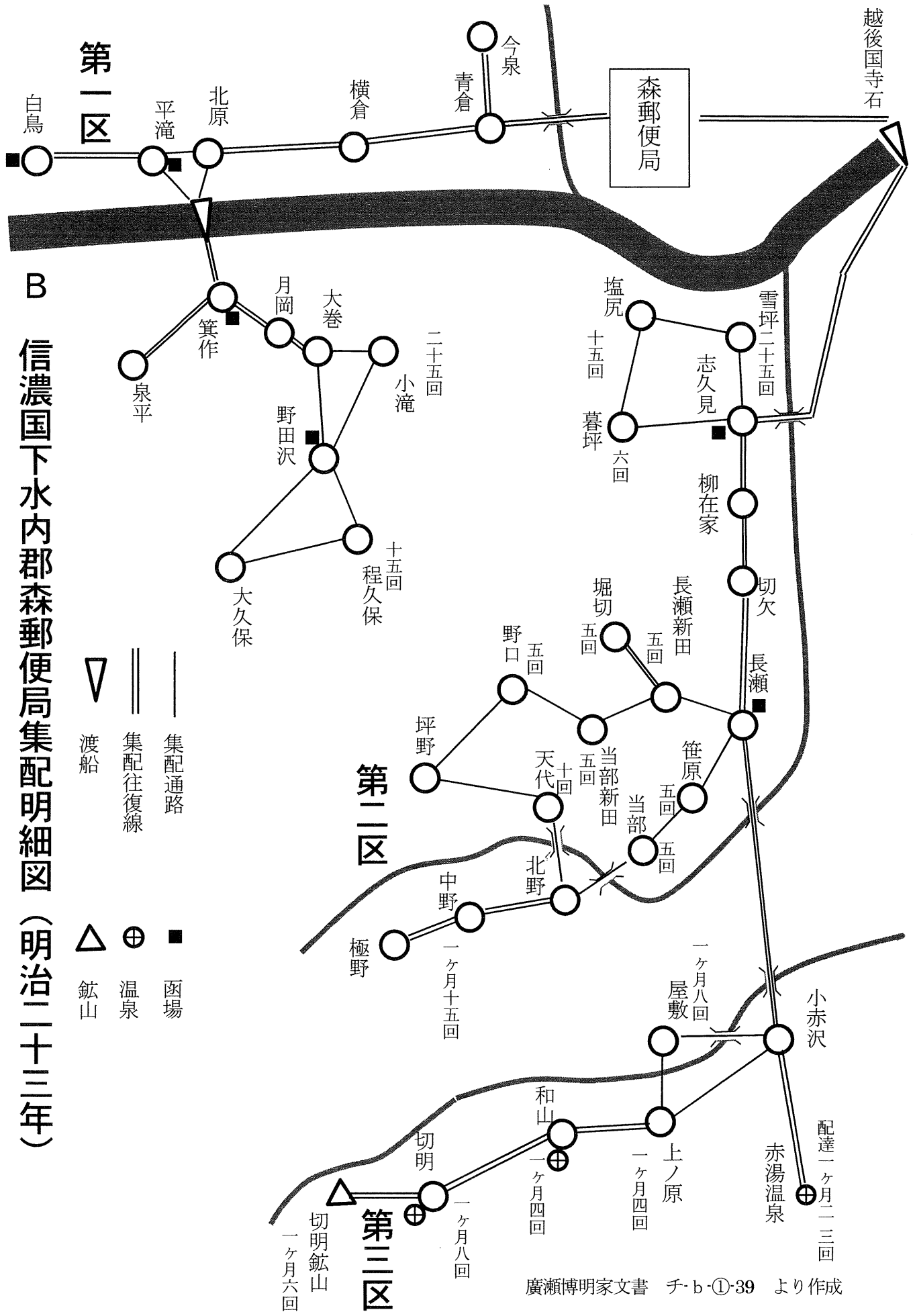
・地域レベルにおける郵便事業の拡大は、函場の設置願や集配線路の改定に見ることができる。函場の増加は、集落戸数の増加よりも。村役場・学校・鉱山などの近代的インフラによるものと思われるが、人々自身の郵便利用の意識の変化（信書・新聞・雑誌）については、信書などの内容（商売取引関係など）を今後分析する必要がある。

A　信濃国下水内郡森郵便局集配明細図（明治二十一年）

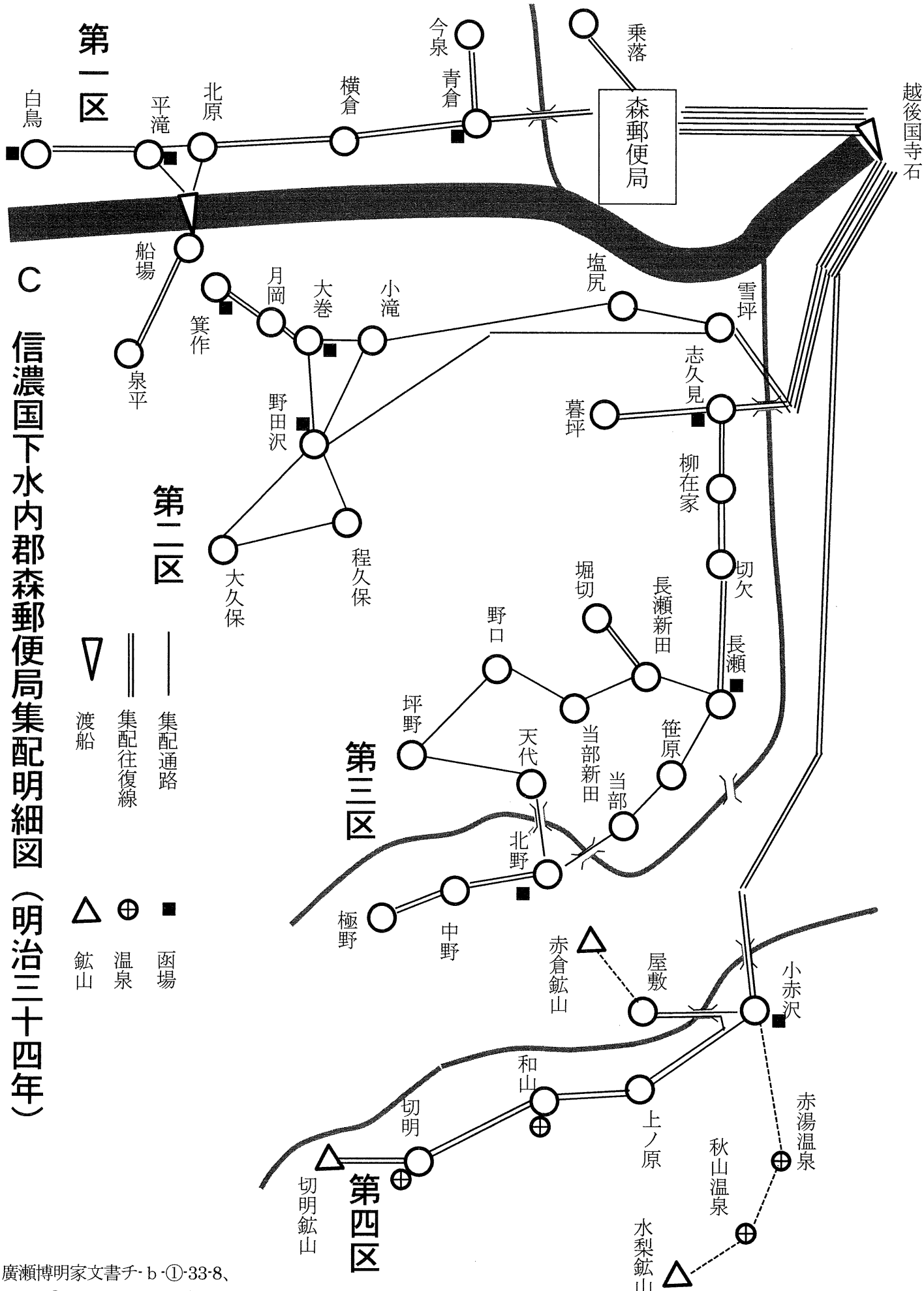


廣瀬博明家文書チ-ｂ-①-64 より作成

B　信濃国下水内郡森郵便局集配明細図（明治二十三年）



廣瀬博明家文書　チ-ｂ-①-39　より作成



廣瀬博明家文書チ-ｂ-①-33-8、
チ-ｂ-①-33-12　より作成

写真「森郵便区集配線路を歩く」

① 集配線路（長瀬―志久見）

2018年4月30日探訪

栄村歴史館（こらっせ）に向かうにあたり、集配線路を歩くことを計画。森宮野原駅前からのバスで加用のバス停で降車し、森郵便区集配線路の一部を実踏した。このバス道の一部は大井平局の集配ルートと重なり、森郵便局から志久見・長瀬等の集落や秋山方面へ向かうルートもここを通る。加用と長瀬は志久見川に架けられた橋で結ばれ、長瀬から秋山方面へ向かう集配線路もこのあたりで川を渡っている。

長瀬から志久見までは切欠と柳在家の２つの集落を経たルートであるが、道はすべて拡幅の上舗装されており、昔年のおもかげを見ることは難しい。

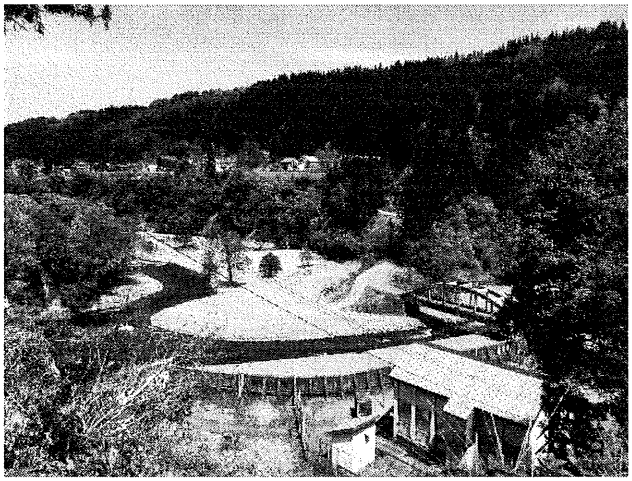


写真１　長瀬より志久見川渡河点をのぞむ

写真２　柳在家集落

集落の中にポストが置かれている。

② 集配線路（切明―和山）

2018年8月12日探訪

信越秋山郷会主催の秋山郷常民塾の体験講座「切明から和山への旧草津街道を歩く」に参加し、森郵便区集配線路の一部を実踏した。文政11年（1828）秋山を訪れた鈴木牧之は秋山紀行に、和山から湯本切明までの道について「嶮岨の山路に衣を褰登る時に蔦草、或ハ木の枝に把り往に怪敷奇石所せきまで積かさなり」「千歳の古木小途を塞ぎて其下蔭を通り」などと記している。場所によっては片側がけのようになり、急坂も多く木の枝につかまりながら進むような個所も少なくない。明治23年（1890）の配達状況は和山が1か月に4回、切明が8回、切明鉱山が6回であった。下流の和山へ行くこの道は旧道として維持されており昔年のおもかげをよく残している。

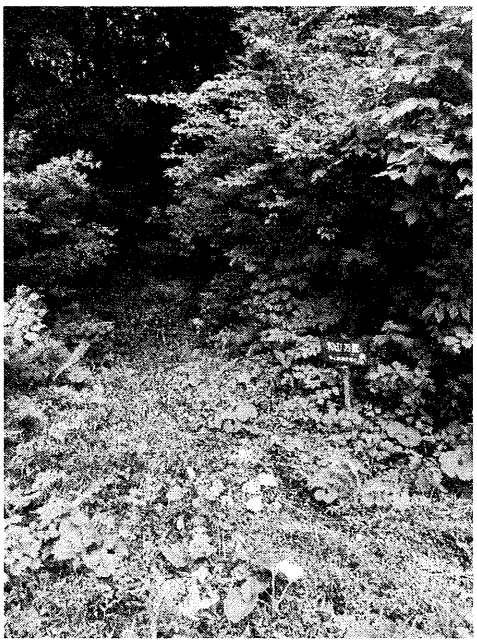


写真３　切明付近の旧草津街道

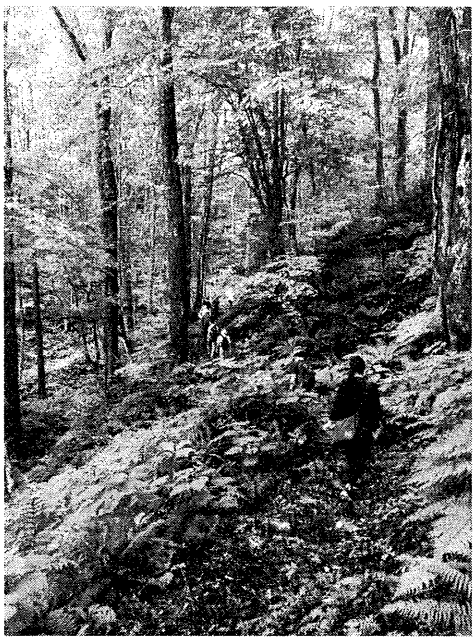


写真４　旧草津街道

向かって左側が中津川。アップダウンが続く。

③集配線路（小滝―塩尻）

2018年11月4日探訪

合同会社小滝プラス主催の古道ウォークに参加し、森郵便区集配線路の一部を実踏した。

この道は志久見街道・善光寺街道ともよばれ、中世から越後国と善光寺を結ぶ道で、千曲川右岸の主要道であった。明治34年の集配線路の改正で千曲川右岸の集配区を再編した際に小滝から塩尻へルートができ、志久見街道の一部を使用している。江戸時代、千曲川右岸の箕作村には多くの枝郷があり、箕作本村と長瀬などの枝郷との連絡にも使われ、箕作郵便局（明治13年～18年）も堺村を郵便区としていたことから志久見街道を集配線路に組み入れていた。

志久見街道は2011年3月12日の長野県北部地震で被害を受けた小滝集落の人々が、復興の一環として行った古道復活プロジェクトで整備された。

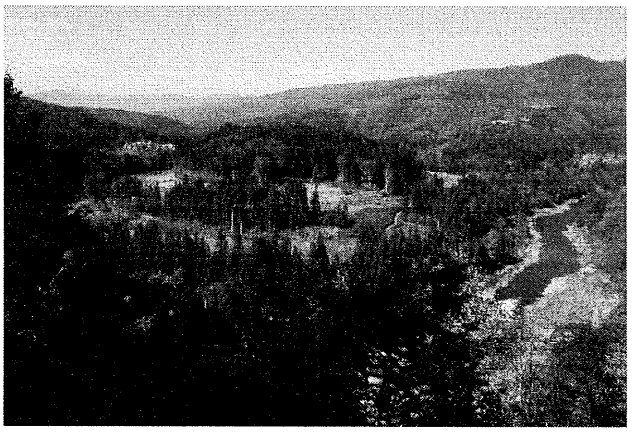


写真7　志久見古道小峠付近より千曲川をのぞむ
向かって左手奥（北西）に小滝集落が見える

写真5　小滝集落より志久見古道をみる

写真8　奈免川を渡る志久見古道

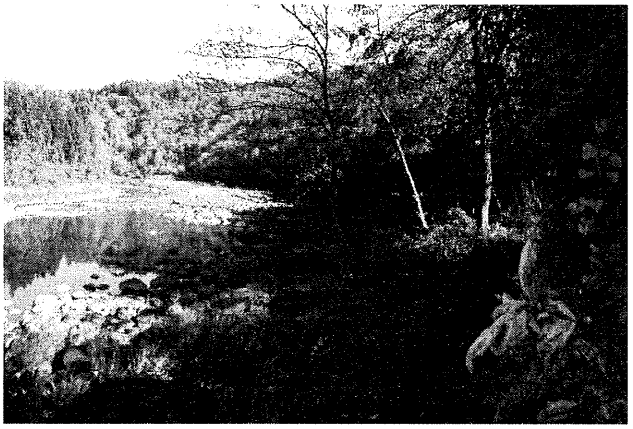


写真6　千曲川右岸の志久見古道を歩く

写真9　志久見古道の分岐（左：塩尻、正面：志久見）

主要参考文献

近辻喜一「多摩の郵便」『郵便史研究』第17号（郵便史研究会　2004年）
藪内吉彦、田原啓介『近代日本郵便史　創業から確率へ』（明石書店　2010年）。特に第4節「地方郵便局の対応」
井上卓朗「日本における近代郵便の成立過程―公用インフラによる郵便ネットワークの形成―」『郵政資料館研究紀要』（日本郵政株式会社郵政資料館　2011年）
小原宏「明治前期における集配郵便局の配置―安房国を中心に―」『郵政資料館研究紀要』第3号（日本郵政株式会社郵政資料館　2012年）
小原宏「明治期における郵便局ネットワークの伸展と調整」『郵政博物館研究紀要』第8号（公益財団法人通信文化協会博物館部　2017年）

長野郵便局『長野県通信沿革誌』（信濃毎日新聞株式会社印刷　1916年）
『栄村史水内編』（栄村史水内編編集委員会　1960年）
『栄村史堺編』（栄村史堺編編集委員会1964年）

参考：旧志久見村各集落の戸数変遷

天保9年(1838)			明治25年(1892)			明治28年(1895)	
町並	54軒	→	志久見	52戸	→	志久見	52戸
柳在家	29軒	→	柳在家	29戸	→	柳在家	29戸
切欠	19軒	→	切欠	19戸	→	切欠	19戸
雪坪	16軒	→	雪坪	14戸	→	雪坪	14戸
塩尻	10軒	→	塩尻	10戸	→	塩尻	10戸
樽坪	6軒	→	暮坪	5戸	→	暮坪	5戸
堀切	3軒	→	堀切	4戸	→	堀切	）8戸
野口	4軒	→	野口	4戸	→	野口	
仁手野	32軒	→	極野	25戸	→	極野	25戸
坪野	27軒	→	坪野	26戸	→	坪野	26戸